

今月の農業情報

尾 張

瀬戸市で稲 WCS「たちあやか」の収穫始まる！！

と き 平成30年9月19日（水）

と ころ 瀬戸市

瀬戸市では、平成22年から耕畜連携による稲 WCS の取組が行われています。本年度から、知多郡東浦町にあるコントラクター組織に収穫調製を委託し、9月19日に67ロール(300kg/ロール)が畜産農家に納品されました。

昨年度に耕種農家、畜産農家及びコントラクター組織が作業日程を調整した結果、収穫調製は9月中旬ごろに決定しました。そのため、農業改良普及課の提案により、本年度から9月中旬に収穫適期を迎える稲 WCS 専用品種「たちあやか」が新たに導入されました。「たちあやか」は慣行品種の「たちすずか」より出穂が20日ほど早く、9月中旬に糊熟期～黄熟期を迎える品種で、本年度は順調に生育し適期収穫を行うことができました。

収量についても2.2t/10aであり、当地域では、これまでの最高収量でした。耕種農家も、ここ数年で一番良い出来だったと手応えを感じていました。

農業改良普及課では今後も高収量で高品質な稲 WCS が生産されるよう継続して支援を行っていきます。



【「たちあやか」の収穫風景】

海 部

早尾紅蓮組合、8月盆出荷は健闘

と き 平成30年10月3日（水）

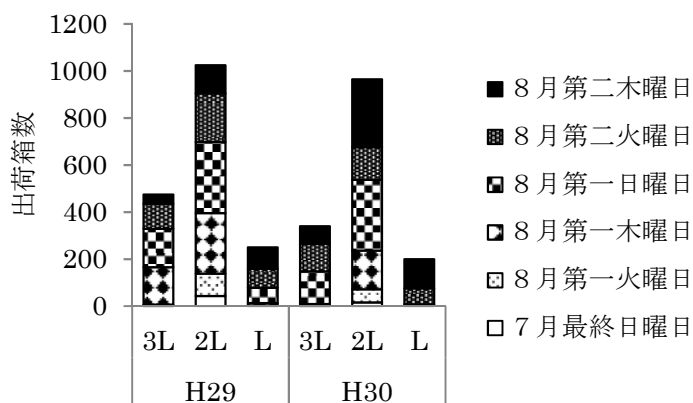
と ころ JAあいち海部レンコンセンター

早尾紅蓮組合が主要出荷市場3社を招き平成30年度通常総会を開催しました。

総会の中で平成30年産の出荷実績が報告され、7月の高温、台風の来襲、生産面積が昨年比7%減と悪条件の中、主力となる8月盆の花の出荷数量は17.5万本（前年対比99.8%）、平均単価107.4円（同99.8%）と健闘しました。ただし、すべての出荷形態（花、開葉、巻葉、蓮台）の総出荷量は4,870ケース（前年比89.8%）、販売金額3,623万円（同94.1%）となりました。

市場からは、本年産の品質は問題なく、SNSを利用したリアルタイムな産地情報が提供されたことを含め非常に良かったとの評価を得ました。

農業改良普及課は、アメダスデータによる出荷予測の精度向上をはじめ、会員数増加を意識したバラ受け共選体制の導入に向けた取組を支援していきます。



【紅蓮の出荷日、規格別出荷ケース数（花のみ）】

とき 平成30年10月23日（火）

ところ 常滑市、半田市のイチゴ生産者

イチゴ高設栽培を行う管内生産者 30 戸によって組織されている知多イチゴロックウール研究会は、常滑市及び半田市の2名の本ぽを参加者全員(26名)で巡回し、定植後1か月を経過した現在の出蕾や開花状況、草勢を確認しました。参加者は、巡回ほ場の園主との質疑応答や会員間の意見交換を活発に行い、今後の栽培管理に向けてのポイントを学びました。



【ほ場巡回で意見交換を行う生産者】

農業改良普及課は、8月末まで続いた猛暑の影響で、頂花房の花芽分化は平年より3～4日程度遅かったこと、9月は二度の台風や長雨の影響で日射量が平年の75%程度となり、苗活着後の草勢がやや弱い傾向であることを説明しました。そのため、今後は株つくりのための光合成を意識して、過度な葉かきは慎んで葉面積確保を心がけること、頂花房(1番花房)の摘花・摘果を行って適切な草勢を保つよう指導しました。

参加者から、「生産者仲間の出蕾・開花状況を確認できて参考になった」、「今回得た情報をこれからの栽培管理に活かしたい」との声があり、有意義な本ぽ巡回となりました。

とき 平成30年10月26日（金）

ところ 西尾市、安城市

10月26日に「西尾茶愛知県GAPの会」が愛知県GAPの申請を行いました。同会は主旨に賛同した者で構成した新たな組織で、会員は71名と管内茶農家の半数強、茶園面積は管内の約6割強の130haを占めます。産地ブランド化の一つの材料とすることが目的で、東京オリンピックパラリンピックへの西尾の抹茶の食材提供も目指しています。

4月に西尾茶のリーダー農家から申し出があり、「西尾の抹茶」として、愛知県GAPへの取り組みが始まりました。8月3日に、農業改良普及課と、西尾市茶業組合、吉良茶業組合、西尾機械製茶組合の各役員9名が打ち合わせ、8月23日に説明会を行い、9月に西尾茶愛知県GAPの会が設立されました。リーダー農家を中心となって各組合が組織的に会員を募ったため、管内茶農家の半数以上が加入しました。各組合役員と担当普及指導員が会のGAP管理者となり、9月から10月にかけて会員の内部点検を実施し、申請に至りました。

内部点検では、ほ場台帳など各書類の整備、農薬保管庫のカギの設置、重油タンクの防油堤の設置などについて指導しました。会員からは、手間がかかるが農業を続けていくためにはGAPの取組は大切なことであるとの反応が多くみられます。

農業改良普及課はリーダー農家や各組合役員と密接に連携し、説明会や内部点検を主導するとともに、各組合役員が行う内部点検を支援しました。今後は、審査を経て年度内の認定を目指しています。認定後も、愛知県GAPの実践や内部点検などが必要であることから、引き続きGAPの確実な実践を指導していきます。

とき 平成30年10月1日（月）

ところ 高野尾花街道 朝津味（三重県津市）

農業改良普及課は、豊田みよし支部の農村生活アドバイザーを対象にセミナーを開催しました。このセミナーでは、女性農業者活躍支援事業を活用し、農業に係る幅広い知識と情報を得るため、直売施設「高野尾花街道 朝津味」まで足を運んでの開催としました。

この施設は、三重県内最大の農産物直売所で、売場面積は650㎡もあります。設立にあたっては、地域農業者・住民からの強い要望があり、農業者も構成員として一翼を担っていました。直売部長から、売上の向上対策として隣接する里山公園とのタイアップや、集客専属職員を配置するなどの取組について説明がありました。参加者は経営継続のための弛まない改善の積み重ねが大切なことを学びつつ、興味深く聞き入っていました。説明後の質疑応答では、「地域活性化の核として本施設を立ち上げたことに感銘した」「生鮮野菜と農産加工品の売場面積の比率にも色々な想いがあることを学べた」等の意見が出されていました。

農業改良普及課は、今後とも女性農業者組織の活動支援を通じて農業者を育成していきます。



【説明を受けるアドバイザー会員】

とき 平成30年9月15日（土）

ところ JA愛知東グリーンセンターしんしろ（新城市豊栄）

新城設楽花き振興連絡協議会主催の花き品評会が、JA愛知東グリーンセンターしんしろにて開催されました。品評会は、鉢物・小ギク・シキミの3部門で開催され、鉢物28点、小ギク13点、シキミ17点の総点数58点が出展されました。

例年、花きの魅力のPRの一環として、一般の来場者に出展物の審査をしてもらっています。前年より20名多い120名が、部門毎に最も気に入った出展物に対して投票を行いました。

鉢花部門では、珍しい花形や花色の品種が入賞しており、花形・花色が消費者の購買意欲を駆り立てる可能性があることがわかりました。出展者からは、「品評会のおかげで消費者の好みがよく分かった。今後栽培を行う上での参考にしたい。」との声が挙がりました。当日は東三河以外からの来場者も多く、新城設楽地域の花きの魅力を効果的にPRすることができました。

また、品評会終了後は、出展物の即売会を実施し、気に入った出展物を購入するために、即売会まで待機していた来場者もあり、得票数の多かった出展物はすぐに売り切れとなりました。

農業改良普及課では、今後も新城設楽地域の花き生産における品質向上に繋がる支援を続けていきます。



【来場者で賑わう品評会会場】

と き 平成30年8月**ところ** 豊橋市内

豊橋市のデルフィニウム栽培は平成3年に始まり、シネンシス系デルフィニウムの全国一の産地となっています。JA豊橋デルフィニウム部会では8月上旬～10月上旬に定植を行いますが、8月定植は高温による立ち枯れや早期抽台（早く花が咲くため短い切花となる）し、品質低下などを招きやすい問題があります。そのため、昨年からの農業改良普及課は、ヒートポンプを導入した2部会員のハウスに実証ほを設けて、夜間冷房による高温対策について技術確立に取り組んでいます。



【順調に生育するデルフィニウム
(右奥がヒートポンプ)】

今夏は定植前から平年以上の暑さが予想されたこともあり、夜間冷房を実施した部会員は5戸に増加しました。初めて取り組んだ部会員は、「この時期の定植では、枯れや生育不良で必ず補植が必要だったが、今年は1本もしないで済んだ」とその効果を実感していました。

農業改良普及課では今後もデルフィニウムの安定生産に向けた取組を支援していきます。

と き 平成30年9月12日（水）**ところ** 渥美農業高等学校（田原市）

田原市青年農業士会は、渥美農業高等学校の3年生24名と意見交換会を行いました。渥美農業高等学校では、就農希望の学生を対象に、就農に対する心構えや関連する諸情報について理解を深めるため、2限の授業として農業経営予定者研修会を開催しています。

1限目は、青年農業士OBの国際農友会会員から海外農業研修の制度とその魅力、愛知県農業大学校が学校紹介を行いました。

2限目は、青年農業士2名が就農について意見交換をし生徒の質問に答えました。自らの経験を踏まえて「多くの農家を見て、やりたい農業のイメージを持って就農して欲しい」などの具体的な助言をしました。

生徒からは、「今日教わったことをこれから実行していきたい」、「海外農業研修に興味を持った」などの感想が聞かれ、就農に向けて大いに参考としていました。



【意見交換会の様子】

青年農業士にとっては、自らの農業経営を見つめ直すことで農業経営に対するモチベーションを高める効果もありました。

農業改良普及課は、今後も、青年農業士会の農業後継者育成活動を支援をしていきます。